

“共同注意”の発達的变化 その3 ——言語獲得期の相互作用に関する質的検討——

吉田直子*

Joint Attention and Its Development : Part 3 : Qualitative Analysis on the Interaction of the Language Acquisition Stage

YOSHIDA Naoko

要 約

言語獲得期の子どもと母親の共同注意は、子どもの象徴機能、言語発達、社会的認知、自己概念などの多くの側面の発達に貢献している。本稿では、一乳児の観察事例を対象に、言語的コミュニケーションの発達と共同注意場面である母子相互作用について、エピソード記述の手法を用いて検証した。その結果、母親は乳児の活動に呼応しながら、例示行動・注意喚起行動・言語化・精緻化提供などの共同注意的関わりを示し、乳児の人の意図理解やコミュニケーション行動の質的变化を支持・促進していることが示唆された。また乳児の語彙使用に際して、母親は叙述的応答、意味付ける応答、誘導的質問、叙述などの発話がみられ、これは共同注意の発達における「足場づくり」の例と考えられる。

キーワード：共同注意 言語獲得期 言語的コミュニケーション エピソード記述

問題

ヒトは集団ごとに異なる言語的コミュニケーションの体系を慣習化しており、子どもたちは生まれた集団の体系だけを習得するといわれる (Tomasello, M. 2003/2008)。その言語的コミュニケーションの共通点は記号 (シンボル) を用いることと文法を備えていることであり、これらの習得は文化的学習や社会的学習を含む社会認知的スキルによって数年をかけて進行するという。

社会認知的スキルは進化の過程で獲得された卓抜した認知能力を基盤として形成されたものである。そのスキルには、興味のあるものに対する注意を他者と共有する能力や離れた対象物への他者の注意や身振りに追従する能力、自分から他者の注意を能動

的に導く能力、他者の意図を理解する能力などが含まれている。とくに乳児の母親との注意の共有は生後9カ月から1年にかけて成立すると言われ、このころに身振りでのコミュニケーションや大人の模倣が可能になることから、注意の共有が言語発達に大きく貢献すると考えられている (Butterworth, G. E. 1995、Tomasello, M. 1995、矢藤、2007、Landry, S. H., et al. 1989)。つまり、乳児の言語的コミュニケーションの発達は他者との注意の共有に依るところが大きいといえよう。

言語的コミュニケーションには身振り (ジェスチャー) や発話などがあるが、発話は語彙からなっており語彙の学習が不可欠である。上述のTomasello, M. によれば、語彙の学習は、先行、基礎、促進の3つのプロセスを経る。先行プロセスとは、1歳前の乳児の発話処理と指示対象の概念化である。発話のためにまず乳児は耳から入る発話の音節や強勢を聞き分ける必要がある。例えば、属する集

* 中部大学現代教育学部児童教育学科
中部大学現代教育学研究所

団において周囲から聞こえる発話の特徴を捉え、分節や強勢のパターンなどに同調できるようになる。逆に他の言語の音素などは区別ができなくなる。日本の1歳児は“la”と“ra”の区別ができなくなる、といったように。また、モノや出来ごとについての感覚運動的相互行為によって、対象の理解すなわち概念化が進む。

第二の基礎プロセスでは、共同注意という大人と子どもの共通のコミュニケーションの土台を確立し、大人の伝達の意図を理解する。共同注意は初期言語の発達に関連し、共同注意の時間が長い親子では子どもの言語理解や言語産出が多いという実験結果が示されている（大藪、2004、田中、2004）。また子どもは共同注意のフレームにおいて、大人が新しい語を用いるときの社会的状況を認識して大人の意図を理解しようとする。第三の促進プロセスでは、語の対比と言語的文脈の理解が中心のテーマとなる。語の対比とは同義語の対比較である。よく似た2つの語の使い方の違いを聞くことによって、2つの語の示す概念が異なる広がりをもつことを理解できるようになる。また言語的文脈の類推から知らない語彙を補完する作業などが行われ、語の学習がほぼ完成する。

以上のような語彙学習のプロセスの説明の背景にあるのは、社会一語用理論である。すなわち、語彙はとくに共同注意行動や文化学習行動、社会認知的スキルという親子の共通基盤とそこでの会話、さらにそれを取りまく慣習のなかで習得され、その後語彙の組み合わせによる統語構文が発達していくと考えられる。そこで共同注意場面での相互作用が言語的コミュニケーションの発達の様相に大きな影響を持つと言える。

本稿では、言語的コミュニケーションの発達と共同注意の関連に注目する。これは語彙の基礎プロセスである1歳前後の時期にあたる。筆者はこれまで、一組の母子の事例観察を通して1歳前後の共同注意状況について2つの側面から検討してきた。1つは、乳児の三項関係の発達、つまり子どもとモノと人という三項関係がどのような母子相互作用の中で獲得されるかという側面であり、2つ目は、子どもが自己と他者を区別し、自己理解を深めていくにあたってどのような母子相互作用が見られるのかを

考察したものである（吉田、2009、2010）。しかし、1歳前後の共同注意は、乳児の精神機能の中で象徴機能・言語発達・社会的認知・自己概念など多くの側面の発達に貢献していることから、本稿では新たに言語発達に着目し、言語的コミュニケーションの発達と母子相互作用について質的な検証を試みる。言語的コミュニケーションの指標としては、叙述的身振り（身振りで指示や命令以外の意図を表現すること）、命令的身振り（身振りで指示すること）、指さし、模倣行動、役割交替、一語発話をとりあげる。これらは9カ月前後からの乳児の前言語的な行動として、また象徴機能の発現として重要な指標（Tomasello、1995、大藪、2004）と言われており、以後の語彙発達につながる行動である。これらの行動が共同注意場面で母親のどのようななかかわりの中で出現するかを検討し、そこに通低している大人の意図理解の発達の様相を省察する。

大人の意図を理解することは、言語が恣意的で協約的な性質（岡本、1986）を持つことから、乳児の言語獲得にとって不可欠の能力であり、叙述的身振り、命令的身振り、指さし、模倣行動、役割交替、などの行動は大人の意図理解が基盤になっていると考えられている。そこで、本稿では共同注意における乳児のこれらの行動が母親の意図や関わりとどのような関連があるかを検討することで言語的コミュニケーションの発達と意図理解について考察していく。なお、母親の共同注意的関わりとして、例示行動、注意喚起行動、言語化、精緻化提供（より詳しく表現すること）などに注目する。これらの行動は、母子相互作用で高い頻度で見られる行動であることが知られており（村瀬ほか、1995）、子どもの言語発達との関連が示唆されてきたからである。

目的

観察事例の記録をもとに、共同注意状況における言語的コミュニケーションと母親の関わりがどのような関連を持つかを検討することをおもな目的とする。

方法

観察対象 2007年10月生まれの男児（A児）とその母親Bさん（20代後半）。A児は周産期から乳児期まで正常範囲の発達であった。生後6カ月から研究協力を依頼し、4週間に一回程度の観察を2歳まで継続した。本稿では0歳7カ月から1歳8カ月までの観察記録を対象とする。

手続き 筆者が協力者の自宅を訪問して、日常使用しているおもちゃを用いて母子が遊んでいるところをビデオカメラで記録した。記録に際しては、母親にはできるだけ対面していつものように遊ぶようお願いし、毎回15～20分程度撮影した。また、撮影中はできるだけ状況をフィールドノーツに記録した。観察期間は2008年5月末から2009年6月中旬までであった。

資料の整理と分析方法 すでに発表した観察事例の記録（吉田、2009、2010）をもとに、これまで分析してこなかった言語的コミュニケーションに関する共同的な関わりに着目して、エピソードの流れを再読し、子どもの行動のうち言語的コミュニケーションの下位行動である叙述的身振り、命令的身振り、指さし、模倣行動、役割交替、一語発話についてその出現と母親の働きかけ（たとえば、共感、例示行動、注意喚起行動、言語化、精緻化提供など）との関連について、メタ観察として再分析した。

記録の収集方法の詳細は前報にゆずるが概略は次のとおりである。観察事例の記録のうち、A児が状況やカメラに慣れて遊びに集中し始めた時から10分間を分析の対象とした。

まず、各観察回（月齢ごと）の逐語的観察記録においてひとまとまりの遊び（同一おもちゃとほぼ同一姿勢による一連の母子の相互作用）の部分のうち「母親もしくは乳児の行為をきっかけに母子が注意を共有しながらひとまとまりの遊びが展開する相互作用」を一つの注意共有のエピソードとして抽出し、エピソード記述の手法でその意味を分析していった。エピソード記述とは「複数のエピソードを重ね合わせて比較考量し、その差異と同質性から、メタ意味を掘り起こすこと」（鯨岡、2005）とされており、エピソードの記述に際しては、「できごとの客観的な流れを描出し、読み手がおよその共通理解に達す

ることができるように表現」し、「間主観的に把握した部分や自分の思い、場の雰囲気を書述に盛り込みつつその意味をとらえる」（鯨岡、2005）必要がある。そこで筆者もこれに倣って、本稿では観察した各回からはほぼ2つのエピソード、合計21のエピソードを抽出し、それぞれに対して（エピソードの流れ）と（メタ観察）に分けて記述してメタ観察の内容を比較検討する。

結果と考察

1 エピソードの記述とメタ観察

0歳7カ月から1歳8カ月のエピソードのうち、言語的コミュニケーションに関わるものをほぼ各月齢2例づつとりあげ、場面の流れ（エピソードの流れ）とメタ観察としてまとめた。メタ観察とは各エピソードの意味を考察するものである。ここでは、A児の行動のうち言語的コミュニケーションの下位行動である叙述的身振り、命令的身振り、指さし、模倣行動、役割交替、一語発話、などの出現と母親の働きかけ（共感、注意喚起行動、例示行動、指示行動、ラベリング、精緻化提供など）との関連に焦点を当てて考察した。記述ではA児は対象児を示し、乳児の発話は母親と区別するためカタカナで表記した。

〈エピソード1：（0歳7カ月半）〉

（エピソードの流れ）母親は、カメラのほうにはっていったA児を抱いて元の位置に座らせ、「Aちゃんの好きな本を読もう」と本を取り出してみせる。対面している。母親は開いたページを見せながら「動物のあかちゃん……」と声を出すと、A児は母親を見上げ、左手を開いたページに置く。母親がそのまま読むと、A児は両手で本の両端を母親と同じように持ちしばらく見入る。その後本を開閉したり、積み木の上にポンと音を立てておいたりする。母は「本好きだもんね」と言いながらA児の頭をなでる。A児が少し本を両手で持ち上げて顔が隠れたので母親は、「いないいないばあ、してるの？」と声をかけ、顔を覗きこむ。A児も少しの間母親を見上げている。そしてA児は両手で持ち上げたので本で顔が隠れる。母親がまた「いないいない……」と言う。母親がちょっと間をおいて「ばあ」と言うとA児は本を下して母を見る。5回これを繰り返した。母親はA児のタイミングの良さに驚き、手を打っ

て喜び、A 児をほめる。

(メタ観察) A 児が本に隠れたタイミングで母親はそれを「いないいないばあ」という叙事的身振りであると理解した。そして、「いないいないばあ」という母親のラベリングによって、A 児も母親の意図を理解し何度もその遊びを繰り返した。母親の共感やタイミングの良い A 児への声かけによる支持もこの遊びの持続に貢献している。

〈エピソード2：(0歳7カ月半)〉

(エピソードの流れ) 母親が A 児を抱いて対面して座らせる。A 児は床にあった黄色い円盤のおもちゃを拾って操作する。母親はしばらくそれを見ていたが、ビニールの縄とびの縄を取り出して、両手でもむように丸めて音を立ててみせる。

A 児がちらとこれを見る。また、母親は縄とびの取っ手のところを両手で別々につかんで、「カチカチ……」と言いながら 10 回以上調子をつけてリズムカルに打ち合わせて見せる。すると A 児が手を出すので母親は丸めた縄を渡す。A 児は片手で取っ手を握り、ひっぱりたり他の手に持ちかえたりする。また片手でひものところを持って上にあげたり下げたりしながら母親をちらっと見る。母親が「こっち貸してね」とひもの余った部分を持ってひっぱりたり揺らしたりすると、A 児も縄の取っ手とひもを持って同じように引っ張る。母子で引っ張ったり揺らしたり、共同的な動きに見える。その後、A 児は取っ手を持った両手を頭の上のほうに持ち上げたり、おろしたりを何度も繰り返す。上げるときは視線も上向きになり、母のほうを見る。

母親が「上手やね、A ちゃん上手やね」と声をかけながら脇の下あたりを両手でさする。

(メタ観察) 母親の注意喚起によって母親の持っていたヒモ(縄とび)で遊び、母親の一部の動作の例示を模倣した。母親は共感したり、体に触るなどの感覚的な支持も含めて、支持的共同注意場面を持続させている。

〈エピソード3：(0歳8カ月半)〉

(エピソードの流れ) 母親が2つのブロックを組み合わせて風車のようなものをつくり「ほら、風車、まわしてみー」と A 児に差し出すと A 児は大きく目を見開いてじっと見て、左手を出してさわり、回し始める。回転が止まると何度も回す。A 児が手を休めたときに母親も同じものに手を出して回す。しばらくして母親が「もっと大きいのにしよう」と風車をいったん自分のほうに持って行ってブロックを追加していると、A 児は「ワー、アー」と体をゆすって不機嫌な声を出し体を乗り出して風車を触ろうとする。そして母親が大きく

なった風車を見せると手は出さないでじっと見ている。母が、風車状に組み立てたブロックを A 児の手に近づけてやると、A 児は少しふれて母親が回す風車を見ている。また機嫌が悪くなり不機嫌な声を出して母親のほうに抱きつくように体を近づける。母親は A 児を片手で抱きとめながらも、「ほら大きくなったよ」、とさらに風車を大きくして回してみせると、A はいったん動きを止めて風車を振り返りちょっと手を出して回し、しばらく見ている。そしてまた母親に抱きつくので母親は風車をおいて A 児を抱いた。

(メタ観察) 母親の動作の例示に対して A 児は模倣行動を示した。やや不機嫌な状況だが、注意喚起によってしばらくは共同注意が続いた。

〈エピソード4：(0歳8カ月半)〉

(エピソードの流れ) 母親が床に並べたブロック、布絵本、ペットボトルのほうに A 児はいはいで近づき、布絵本に手を出してそれを抑えながら座位になる。すると偶然、布絵本に付属していたスイッチが入ってメロディが始まる。母親のほうを見たので母親が「あ、上手」と言って、「たんたんたん」と唱和しながら、その本に手を出し、ページをめくって「ほらこれ、A ちゃんお風呂、A ちゃんねんね」といろいろ見せて話している。A 児と一緒に本を見ているとまたスイッチが入ってメロディが鳴りだすと、A は体をゆする。そして両手でパチパチと拍手する。母親が「うーん」と顔を近づけニコニコ見守る。「ぱちぱちするもんね」と言い、メロディに合わせて母親も拍手をする。メロディが止んでも A 児は他のおもちゃを手にもったまま体をゆすって母親のほうを見る。そこで母親は A 児の動きに合わせて手拍子をしながら「うれしい? A ちゃん?」と言う。そしてスイッチを入れて拍手をしながら小声で歌う。A 児は母親を見上げメロディにあわせるかのように体をゆすり母親を見上げたり音源の布絵本を見たりする。メロディが止まるとしばらくしてまた母親を見上げて体をゆするの、母はスイッチを入れメロディに合わせて歌いながら拍手をする。するとまたしばらくして体をゆすったり手に持ったおもちゃを振ったりする。

(メタ観察) はじめに、母親の意図を理解して A 児がメロディに合わせて叙事的身振りを示したと思われる。その後母親が共感的に見守り言語化し A 児の身振りを模倣している。メロディが止まっても A 児が体をゆするのは要求的な身振りでありこれにも母親は応答しており、一定のコミュニケーションが成立している。

〈エピソード5：(0歳9カ月半)〉

(エピソードの流れ) 魔法瓶やブロックを前に二人で

やや斜めに向きあっている。A 児は腰を浮かしながら、いろいろなおもちゃをひとつずつ拾い上げて手に持って、それを見たり放したりしている。母親が、魔法瓶の中蓋を手にとってはじめは「もしもーし」と電話のまねをしていたが、A 児が関心を示さないで、目の前で中蓋を蓋に入れてその蓋を振って見せる。振ると音が出るので、A 児は右手に魔法瓶をもったまま、母と蓋を見上げる。母が蓋を「あー面白かった、置いておこう、ここに」と言いながら、A 児のまえに置くと、A 児はその蓋の動きに合わせて視線を動かし、床に置かれた蓋をすぐ左手で拾い上げて、母親と同じように振って音を出す。振りながら、母を見たり、カメラを見たりする。嬉しそうな表情であった。

（メタ観察）母親の話しかけとおもちゃの扱い方についての例示的な注意喚起行動によって A 児の模倣行動が誘導されたと思われる。A 児が模倣しながら母親をうれしそうに注視しているのは、社会的参照に類似している。

〈エピソード6：（0歳9カ月半）〉

（エピソードの流れ）魔法瓶の蓋や魔法瓶、ブロックが床にあり、A 児はそれらを散らすようになでて、その後魔法瓶の蓋を手にとってなでまわす。母親が口の中で「ココココ」と言うので A 児は少し母を見上げた。A 児は蓋をコップのようにして飲む真似をした。母親が「うーん、上手」「上手やね」と A 児の頭をなでる。そして、母親は、「はい」といって魔法瓶を傾けてその蓋に「とくとくとく」と言いながら中のものを注ぐ真似をし、蓋を口を持って行って飲む真似をする。A 児はそれを見上げている。母が今度は「はいどうぞ」と A 児に蓋を渡すと、A 児は蓋を両手で抱え込んで飲むように口をつけ、結局蓋を舐める。母は「うんおいしいー」「うーんおいしいねー」と A 児の顔を覗き込み、その舐めるしぐさに合わせて言う。再び A 児のもっている蓋に中のものを注ぐ真似をして「はい」、「とくとくとく」とわたすと、A 児は蓋を舐め、母を見たり周りをみたりする。

（メタ観察）A 児が蓋をコップに見たてて飲むふりという象徴的行為をしたので母親は賞賛した。そのためかその行為を反復した。二人で役割を交替しながら象徴的遊びをしており、A 児は母親の行為の意図を理解している様子であった。母親は代理的な言語表現をしている。

〈エピソード7：（0歳10カ月半）〉

（エピソードの流れ）A 児が棒に房のついたおもちゃを「アー」と声を出して持って振り母親のほうを見る。

母親は見守っている。A 児が、右横のほうにある透明のプラスチック容器（上部があいている）に、房のついたおもちゃを「アー」と言いながら差し込むように触れさせる。そのとき容器が動いて A 児のおもちゃが触れなくなったので母親が容器を支えて容器のあいている上部を A 児のほうに向けると、A 児は「ウー、アー」と言いながら房のおもちゃを試行錯誤ののちなんとか容器の中にいれて、手を放す。母親が「あー上手」と言うところと母親のほうを見た。今度は母親の持っている容器を自分で持って、中の房のおもちゃを取り出し、容器だけを何回も振る。しばらく容器を振るという遊びに熱中した。

（メタ観察）A 児は喃語を発声しながらモノを操作し、母親に注意を喚起して母を見るなど社会的参照に近い行為が見られた。その後母親の支持的な関わりのおかげでモノ操作がうまくいったときの発声は、共感を誘うような情緒的発声であるが、伝えたい意志が感じられた。

〈エピソード8：（0歳10カ月半）〉

（エピソードの流れ）A 児は小さなうちわを拾い上げ、右手で何回も仰ぐようなしぐさをする。母親が房のついた棒を持って揺らしながら A 児を見ていると、母親のほうをちょっと見て「ウー」といってうちわを差し出す。「はいありがとう」と言って母親が受け取ると、A 児は母親の持っている房のついた棒を取る。

そしてそれも放して、母親と逆のほうに体を倒して這って行こうとする。そこで母親が房のついた棒をひろって、房のついたほうを見せながら「ぼんぼんぼん、ぼんぼんぼん」と自分の顔の上のほうで弧を描くように振ってみせる。A 児は振り向いてすわりなおし、小さなうちわを拾いながら母親のほうを見上げる。母親の振るのを見ながら、自分もうちわを振る。母はずっと、「ぼんぼん……」と節をつけながら振って、そのおもちゃを A 児に渡そうとする。そのとき、A 児も持っているうちわを「ウー」と言って差し出すが、母親が受け取ろうとしても手を離さずまた自分でもまた振り始めた。それを母が見守っているとしばらくして、自分からうちわを「ウー」と言って差し出し母が「ありがとう」と受け取ると手を離れた。

（メタ観察）モノのやりもらいという三項的相互作用において、命令的な意味合いをもつ身振りと発声が見られた。また母親の注意喚起的で誘導的なおもちゃ操作をみて A 児はその行為の模倣をした。

〈エピソード9：（1歳0カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児はカメラのほうに向かって座り、母親は A 児のほうを向いて座っている。A 児の

前には10 cm 大の立方体のおもちゃがある。A 児はそのおもちゃを両手で触りながら左手のほうにいる母親を見ている。母親はA 児のすることを見ている。しばらくして母親が自分の前で絵本を広げるとA 児は左を向いて絵本を見て、「アーウー」と言って母親を見る。母親が「かおかおどんなかおー？」と絵本を開いて顔を絵本に隠すしぐさをするとA 児はまた「アーウー」と言う。このときA 児は両手で立方体のおもちゃをなでるような押さえつけるようにしぐさをしていた。そして視線を立方体のおもちゃに向け、その左手の取っ手のようなところを引っ張って開けようとする。その立方体のおもちゃの取っ手に対して力を入れても開かないというように「アー」と不満げな声を出して同時に母親を見あげる。

母親が、「開かない？」と言いながらA 児とおもちゃをみながら取っ手を引っ張って扉を開けてみせながら、「ここだよ、ここ開けるの、ここだよ」と言う。

A 児は、しばらく母親のやって見せた取っ手を引っ張る動作を模倣し、自分も引っ張って開けたり閉めたりする。しばらくしてまた、自分ではおもちゃの開閉部分を開けられなくなり、母親のほうを見て「アー」と言う。

母親はA 児の発声の模倣のように「あー？、開かない？ こー、ほら」と手を伸ばして開けて見せる。

(メタ観察) 母親のモノ提示に対する意図の理解と応答的な発声が見られた。またA 児は自分の行為がうまくいかず母親を見ながら要求的な発声をしたが、それにこたえて母親が応答し、例示的な行為をするとそれを模倣した。二度目の要求的発声に対して母親は、A 児の発声を模倣しながら応答した。

〈エピソード10：(1歳0カ月)〉

(エピソードの流れ) A 児は立ち上がって50 cm 大の布製のおもちゃ箱を覗き込んでいる。母親も一緒に覗き込み、20 cm 大のゾウのぬいぐるみを取り出しA 児の顔に近づけながら「ちゅーして」と言う。A 児はそのぬいぐるみに顔を近づけようとするが途中で止めてまた箱の中のをぞき、「アー」といいながらキリンのぬいぐるみを手に取る。ぬいぐるみと母親を交互に見ながら母親に寄り掛かって(立ち姿勢はまだ不安定なため)「ワーワ」と言う。母親はそれに対して「わんわんだったねー」と言いながら、A 児の持っているキリンのぬいぐるみを一緒に持って、「わーんわん、わーんわん。はい、ちゅーは？」と動かしてみせて、さらにA 児の顔に近づける。

A 児は顔をさらに近づけてキリンの口のところに自

分の口を近づける。母親が「やさしいねー」と言いながらA 児の頭をなでる。A 児は、母親を見たり箱を見たりして箱の中から別のものに手を伸ばしながら「ワーワ」と言う。母親も箱の中を見て「わんわんにちゅーするの？」と言いながら、ぬいぐるみではなくソフトクリーム状のおもちゃ(上半分が半球形の布製で下半分はとがった円錐形を逆さにした形)を取り出して食べる真似をする。A 児はそれを見ていて、自分も手を伸ばしてそのおもちゃをつかみ舐めるようなしぐさをした。A 児はここまで立ったままだったが、ふらついて尻もちをつきそのまま座位でソフトクリームを舐めるようなしぐさを繰り返している。

(メタ観察) 母親の意図を理解した行為が見られた。A 児がぬいぐるみに命名的な発声をするすると母親はそれを精緻化する応答をしたあと要求的な話しかけをする。これに対してA 児は母親の意図を理解した行為を見せ、母親はそれをほめている。またA 児はとくに母親の発声がなくても行為だけをみて母親の「舐める」という行為を模倣した。

〈エピソード11：(1歳1カ月)〉

(エピソードの流れ) A 児はうつむいて両手に色紙を持って操作していたが、母親が太鼓状のおもちゃにスプーンを打ち付けて音をさせたのでそちらを振り向く。そして、母親のほうに向きなおり、色紙を手離し母親の持っているスプーンに手を伸ばしてつかみ、自分の方にスプーンの先を向けて舐めるようなしぐさをする。母親が、A 児と一緒に持っていたスプーンを離してA 児に渡すと、A 児はスプーンを母親の口に近づける。母親がスプーン先の部分に向けて口を開けたので、A 児は「ワウワウ」と言いながら、しばらくそのままスプーン先の部分を母親の口のほうに差し出していたがゆらゆらして尻もちをついてしまった。

(メタ観察) A 児は母親の誘導的な音刺激に誘われて母親の持っているスプーンに注意を向け、まず自分が舐めるしぐさをし、その後同じことを母親にもさせており、役割交替に関わる場面である。

〈エピソード12：(1歳1カ月)〉

(エピソードの流れ) A 児は「アウアウ」と言いながら蓋つきの容器の蓋をかぶせたり外したりしている。その前で母親はA 児をみながらも、「○○を作ろうかな」といい、別のおもちゃ(プラスチックの茶碗のようなもの)に泡立て器を差し込んで攪拌するようなしぐさをし、A 児は母親をちらっとみるが持っている容器にボールを入れたりして二人はしばらく並行遊びのような活動であった。そのあと母親は「じゃあ、お醤油入れ

ようかな」とおもちゃのお醤油入れを取り上げておもちゃの茶碗のふちにあてて音を立てると、A 児はそれを見て、持っている容器を手離して、床にあったお皿とフォークを持って、かきまぜるようなしぐさを始めた。（メタ観察）A 児は自分の遊びをやめて母親のかきまぜるというしぐさをやや遅延しながらも模倣している。

（1 歳 2 カ月） 該当するエピソードは見られなかった。

〈エピソード 13：（1 歳 3 カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児は「バーバーバー（ボールの意）」と言いながら 30 cm 大のビニールのボールのほうに歩いて行く。母親も立ち上がり「サッカーするの？」といってボールを A 児の前に置く。A 児は片足を上げてうまくボールを蹴って 2 m くらい前に転がった。母親が「すごーい」と言いながら A 児のほうにボールをそっと蹴り返してやる。すると嬉しそうな表情でまた A 児はボールを蹴り、今度はボールは壁に当たって自分のところに帰ってくる。それを A 児は手でつかんで持ち、足を動かして蹴ろうとするがうまく蹴ることができなかった。そしてボールははずみで手を離れて転がった。母親はそれを拾って A 児に渡そうとするが A 児はほかのおもちゃをつかんで座りこんだ。

（メタ観察）A 児には命名的な発声があり母親はそれを理解し遊びを設定したようだ（足場づくり）。ボールのやりとりが少しの間成立し、共感的な楽しい行為として部分的な役割交替が演じられた。

〈エピソード 14：（1 歳 3 カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児は「ブーブー」と言いながら母親を見上げて本のほうを指さす。母親は「ぶー？どれ？」と言いながら本を取り出し A 児を膝にのせて一緒に本を見ようとする。A 児はまた「ブーブー」と言いながら本をめくり、あるところを指さし、その手を丸めて口に当てる。母親は A 児のそのしぐさが本に載っているラッパのことだと気づき「ぷっぷーだ、ぷっぷー」と同じように手を口のところでまるめて、A 児の顔を覗き込んで手のラッパの形を A 児に見せる。A 児も何度も「ブーブー」と言いながら手を丸めて口を持って行って母親を見上げる。また本を指さす。

（メタ観察）A 児は叙述的な身振り、命名、指さしによって意図を伝達しようとし、それに対して母親が A 児の行為を意味づけて応答することでコミュニケーションが成立していると考えられる。

〈エピソード 15：（1 歳 4 カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児は直方体の積み木（長さ 10 cm）を縦に 2 個積んで、3 個目をそっと積み上げて母親をちらりと見る。母親は腹ばいになって A 児と同じ目の位置から積み木に顔を 30 cm ぐらいに近づけ、「すごーい」と高い声を上げる。A 児は今度は小さな立方体の積み木をその上に乗せようとし、積み木タワー全体が揺れたので左手を添えて倒れないようにした。母親は「うわー、すごーい」と賞賛の声を発するが、A 児は真剣な表情でもう一個立方体を積んだあと、自慢するように母を見てパチパチと拍手をする。拍手の際、全身を揺らして拍子をとる。にこにこしている。その後、一度積み木タワーは崩れたが A 児はまた高く積んだ。母親は A 児を覗き込んで褒め、A 児は母親を見て「アーアー」と言いながら両手を叩いて喜ぶ、ということが 2 回繰り返された。

（メタ観察）A 児は、M の称賛や見守りに支えられてうまく積み木ができたことを喜び、そのことを叙述的な身振りで示していると言える。

〈エピソード 16：（1 歳 5 カ月）〉

（エピソードの流れ）スイッチを押すと上部の丸いスポンジ部分がボンと飛び出す「ソフトクリーム」の形をしたおもちゃがあり、A 児はこのころよく遊んでいた。丸いスポンジには 30 センチほどの紐がついていて、ボンと飛び出してもスポンジとスイッチのある本体（ソフトクリームの下の部分）が離れ離れにならないようになっている。A 児は丸いスポンジが乗っている状態のこのおもちゃを右手で持って母親に差し出し、スイッチを押してもらい、スポンジが飛び出た拍子に「ワーッ」と言いながらよろこぶ。そして左手で少し紐をたぐって母親に差し出しスポンジをまた元に戻してもらい、自分でスイッチを押して飛びださせる。飛び出る拍子に「アーアー」と言って嬉しそうに母親を見る。そしてまた丸いスポンジを紐をたぐって乗せようとして自分ではできないので母親に差し出す。母親がそれを乗せてやると、ちょっとソフトクリームを舐める真似をする。ほとんど口をつけているので母親が「おいしい？」と聞いている。その後舐めるのをやめてまたスイッチを押してボンと飛び出させて喜ぶ。そして母親が持っているスポンジを差し出して本体に乗せてもらい、今度は近くのゾウのぬいぐるみに食べさせるしぐさをしてからまたスイッチを押して飛び出させて喜ぶ。

（メタ観察）自分でできないことをやってもらおうとする命令的な身振りを何度も繰り返し母親がそれに応答している。互いに意図を理解し共感的な交流の中で、

同じことを繰り返す役割交替ゲームのような場面である。

〈エピソード 17：（1 歳 6 カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児は自分で本を持ってきて母親に渡し、母親の横に座り本を見る体勢をとる。母親は「読むの？」と受け取って、あるページをさっと開けて「あー、いた」と少し大きな声を出す。A 児は両手を叩き喜ぶ。母親が別のページを開け、「ここにもいるよー、がおがおー」とおどけたように言うと A 児は、「カイカイ（こわいこわい）」と言って本を閉じるように手をだす。母親は「こわいー？」と本を開けたまま渡すと A 児は自分で本をつかんでページを覗き込んで指さしながら「ガオー」と、いう。何度も指さして「ガオーガオー」といい、母親に寄りかかりながら、母親と一緒に本に手をかけて本を閉じたり開いたりする。

（メタ観察）A 児は、命令的な身振り、指さしで意志を伝え、母親が応答している。また母親の意図を理解し共感を示す。A 児は怪獣に対する語彙として「ガオー」、怖いことを「カイ」と発声し、母親に絵本の絵について叙述している。母親は本を持って一緒に姿勢を保っている。

〈エピソード 18：（1 歳 6 カ月）〉

（エピソードの流れ）エピソード 17 の続きで、A 児は絵本を覗き込むようにして本自体を指さし「ガオー」という。母親は胸のところに閉じた本を抱えて、「いないいない、いないいない、……ぱっ」といいながら急にぱっとページを開けて、A 児の目の前に本を差し出す。A 児は拍子をとるように頭をこっくりと動かし、母親がページを開いた拍子に「カイカイ（こわいこわい）」と言いながら覗き込む。「ガオ、ココ」という。本当にこわがっているというより、面白がって言っているように感じられる。母親は「いたねー」と言いながら、また本を閉じて「どーこだ」と言いながらぱっとページを開けてみせる。A 児はページが開くのを待つようにじっと母親の顔を見て、ページが開いた瞬間に、「ココ、ガオ」と指さし、うれしそうに言う。母親は「びんばーん」と高い声で言って、「かあかあもいるよ、どこだ？」と聞くと、A 児は「カアカア」と言いながら指さす。こんな調子で、母親は本を開閉させて、愉快そうに「どーこだ」と言いながら、A 児が知っているワニさん、ちゅんちゅん、あいあい、などを当てさせる遊びが 3 分ぐらい続いた。A 児は母親が動物の命名をするたびに模倣していた。

（メタ観察）母親の要求（本を見て動物をあてる）やことばを理解して、命名しながら指さすことを繰り返した。

た。役割交替ゲームの要素もあった。自発語に二語文ともいえる発声があり、また母親の質問に対して絵を指さしながら動物の名前、3、4 個を反復的に命名した。

〈エピソード 19：（1 歳 7 カ月）〉

（エピソードの流れ）おもちゃのトマトをフライパンに入れたあと皿に移し替えて、「コエー（これ）コエー（これ）」と言いながら皿ごと母親の方に捧げ持つようにして見せる。その拍子に頭をペコンとさげてまるで「どうぞ」と言っているようである。母親が皿を受け取ると A 児は、中腰になって皿の中のトマトをつかんで母親の口に持っていく。母親が「うまうま」と言いながら食べる真似をすると、さらに母親の口に突っ込もうとする。A 児は自分も口を開けている。母親が「おいしい」と言いながらうなずいて、トマトを持って「A ちゃんは」と言う。そしてトマトを A 児の口に近づけると A 児は実際にトマトを舐めている。母親がトマトを A 児の口から離すと口をもぐもぐと動かして食べる真似のようなしぐさをする。母親が「おいしい？」と聞くとおうむ返しに「オイシイ」と言う。そして、今度は近くにあったピーマンのおもちゃを取り上げて母親に渡す。母親は「ありがと」と言ってピーマンを食べる真似をして皿におくと、A 児ははじめピーマンを「アウアウ」と声を出しながらフライパンでたたいたが、その後ピーマンのおもちゃをつかんで口にくわえた。

（メタ観察）命令的な身振りとともに意味のある発声が見られた。食べもののおもちゃを使った象徴遊びが始まり、母親の誘導によって役割交替をしながらその遊びが続いた。母親の質問にオウム返しに応答した。

〈エピソード 20：（1 歳 7 カ月）〉

（エピソードの流れ）A 児が「ブーブー」と言いながら赤いミニカーを床でころがしている。母親が「ころころしよう」と言うと A 児は「イイヨ」と言って、ミニカーを何回か床で前後に動かして母親のほうに行くように勢いをつけて手を離したが、ミニカーは A 児のほうに動いた。母親が「ころころ……」と言いながらミニカーをつかんで、母親の位置から A 児のほうに走らせると A 児は「ハイブー」と言いながら、またミニカーをつかんで方向を変え、今度は母親のほうに走らせる。するとミニカーが母親の方へ行かず少しそれで壁に当たって止まったので、A 児は立ち上がって自分もミニカーのほうに歩いて追いかける。母親が「あ、来た、はい座って」と自分の位置に A 児を座らせようとするが、A 児は手元に転がっていたビーチボールをとりあげ、ポンと蹴ってボールを使って遊びはじめ、1、2 回母親と交互にボールのやりとりをした。

(メタ観察) 母親の誘いのことばに A 児もことばで応答して、ミニカーを交替で走らせる役割交替の遊びが展開された。行為をことばで表現する場面もあったが途中でボールによる役割交替の遊びになった。

〈エピソード 21：(1 歳 8 カ月)〉

(エピソードの流れ) 母親が、床に広げた大きな紙に線路の絵を描いてそこに電車を置こうとしていた。A 児がその電車をつかみ取り持っていった。母親は「A ちゃんが取ったあ」と言いながら両手を目に当てて泣く真似をした。すると A 児は電車をもって行きかけて振り向き、始めボカンとして母親を見ていたが、すぐにニヤッと笑って母親のほうに近づいて母親の顔を覗き込む。すると母親はパッと手を離して A 児を抱いて「わーだまされた、泣いてないよう」と笑顔で言って電車を取り上げる。A 児ははにっこりしてすぐに母親からさっと離れる。そして 3m くらい離れたところで、「ナイト、ママナイト」と言う。母親が、「えーん、A ちゃんがいないう」と言いながら両手を目に当てて泣く真似をすると、A 児はさーと母親のところまで勢いをつけて走って行って体を母親にぶつけるようにする。母親が「わー、A が来たー」とうれしそうな声で抱きとめる。するとまたすぐ A 児は母親から離れて「ナイト」と言う。これを 3 回繰り返して楽しそうだった。

(メタ観察) 母親の〈泣く振り〉という遊びの意図を理解し、自分もその遊びに参加した。その際、母親にことばで要求している。この遊びは、母親のジェスチャーが〈泣く振り〉であって本当は泣いていないことを理解しており、一種の象徴遊びといえよう。

2 子どもの言語的コミュニケーションの発達と共同注意的関わりに関連について

各エピソードのメタ観察において、A 児のコミュニケーション行動と母親の関わりに関する言語発達について、これまでの研究を背景にしながら意味づけて解釈を試みた。その結果これらのエピソードに共通しているのは、同じモノや同じ事柄を共有しているという共同注意場面であること、およびどのエピソードにおいても A 児は母親の意図を理解して遊びを共に展開していると考えられることである。母親の意図は、○○遊びをしよう、△△をこういうふうに使ってみよう、あるいはこの絵本の動物を見よう、という遊びの誘導やモノへの注意喚起である場合がほとんどであるが、A 児は、母親の意図的な働きかけに対して了解可能で整合性のある行為や応

答的な行為を示しているからである。このような A 児の行為に対して母親は、遊びや注意の持続のために注意喚起・支持・共感・賞賛・模倣など共有テーマに応じた関わり方をしており、そのプロセスで A 児はより明確に母親の意図を理解していくことができたのではないと思われる。

そのような母親の意図理解を土台にして具体的な言語的コミュニケーション行動が見られるようになっていく過程は、エピソードの 1～21 までに示した通りである。そこで、A 児の言語的コミュニケーションの発達と母親の関わりについて詳細に考えてみたい。検討材料として、表 1 に示したようにメタ観察のキーワードを一覧表にまとめてみた。これをもとに各項目の出現状況について時間軸を指標に見てみると、身振りの出現は 0 歳 7 カ月、0 歳 8 カ月、0 歳 10 カ月、1 歳 3 カ月、1 歳 4 カ月、1 歳 5 カ月、1 歳 6 カ月、1 歳 7 カ月、と出現時期に偏りはないが母親の関わりの質に前半と後半では違いがみられる。0 歳 7 カ月、0 歳 8 カ月の叙述的身振りに対する母親の関わりは、(言語化)であり、まだ語彙を持たない時期の A 児のためにことばを添えたものであろう。その後の叙述的身振りに対しては、母親はことばを添えることなく直接応答したり共感を示しており、母親は言語化の必要性が低くなったと考えたからだと思われる。次に、A 児が母親の行動を模倣する行為は 1 歳 1 カ月まで出現している。役割交替、たとえばボールのやりとりや食べ物を食べる役と提供する役などの出現は 1 歳 1 カ月以降に多い。役割交替は、コミュニケーションにおいて聞く人話す人の役割交替を体験する原初的な現象といわれており、子どもと母親の双方が「役を替わる」ことを意識しなければ出てこない現象であり、1 歳過ぎにこれが見られることは A 児の言語発達と母親の関わりの産物と言えよう。

最後に A 児の発声であるが、初めて命名的な発声「ワーワ」(キリンの絵を見て)が見られたのは 1 歳 0 カ月のときであった。これに対して母親は「わんわんに……」と応答しており、発声の精緻化を提供していると思われる。その後のエピソードでも A 児の命名行動が増え、それについて表 1 に示すように母親はさまざまな反応をしている。すなわち、1 歳 1 カ月の喃語に対しては(叙述的応答)、1 歳 3

表1 A児の言語的コミュニケーション行動と母親の関わり方の要約

() : 母親の行動

	年齢	身振り	模倣行動	役割交替	発声・発語	母親の意図の理解
1	0 : 7	叙述的身振り (言語化)				あり (支持・共感)
2	0 : 7		あり (例示行動)			あり (注意喚起行動)
3	0 : 8		あり (例示行動)		不機嫌な発声	あり (注意喚起行動)
4	0 : 8	叙述的身振り 要求的身振り (言語化・応答)				あり (見守り・共感)
5	0 : 9		あり (例示行動)			あり (注意喚起行動)
6	0 : 9			あり	(代理的発話)	あり・象徴遊び (賞賛)
7	0 : 10				喃語	社会的参照 (支持的共同注意)
8	0 : 10	命令的身振り (応答)	あり (例示行動)		命令的発声 (応答)	あり (注意喚起的発声)
9	1 : 0		あり (例示行動)		応答的発声 要求的発声 (モノ提示)	あり (模倣的発声)
10	1 : 0		あり (例示行動)		命名的発声 (精緻化・要求的 話しかけ)	あり (共感・賞讃)
11	1 : 1			役割交替を要求		あり (誘導的音刺激)
12	1 : 1		遅延模倣 (例示行動)		喃語 (叙述的応答)	あり (注意喚起的行動)
13	1 : 3			部分的な交替	命名的発声 (呼応した遊び)	あり (誘導・共感)
14	1 : 3	叙述的な身振り 指さし (応答)			命名 (意味付けて応答)	あり 自分から意図を伝達
15	1 : 4	叙述的な身振り (賞讃)				あり
16	1 : 5	命令的身振り (応答・共感)		部分的な交替		あり
17	1 : 6	叙述的な身振り 指さし (応答)			命名・形容詞 (応答)	あり
18	1 : 6	指さし (質問)		ゲーム的交替	命名・2語文 (応答)	あり
19	1 : 7	命令的身振り (応答)		あり	指示語・オウム返 し (質問・叙述)	あり・象徴遊び (誘導・応答)
20	1 : 7			あり	命名・応答 (誘導・応答)	あり (誘導・応答)
21	1 : 8				要求語	あり・象徴遊び (応答的・演技的)

カ月の命名的発声には(呼応した遊び)、命名には(意味づけて応答)、1歳6カ月以降も、A児の命名などの発声に(応答)、(質問)、(叙述)、(誘導)など、A児の発声内容や意味に応じた関わりをしている

といえるだろう。

つまり母親は子どもの発声に応じて関わり方や発話内容を変え、子どもの場面理解がより進むよう、また適切なコミュニケーションができるよう言語獲

得への足場づくりを心掛けていといえよう。

今後の課題

本稿では、観察事例の記録をもとに、共同注意状況における乳児期の言語的コミュニケーションの発達と母親の関わりについて、エピソードを分析することで考察した。その結果、母親の共同注意的関わりとして、例示行動、注意喚起行動、言語化、精緻化提供などが、子どもの示すコミュニケーション行動の発達と内容に応じてきめ細かく作用し、子どもの注意や理解の発達を支持していることが示唆された。母親のこれらの行動は、絵本読みなどの相互作用で高い頻度で見られる行動である（村瀬ほか、1995）が、日常的な状況での自然な対面交渉においても確認されたといえよう。さらに、母親の関わりでは、（叙述的応答）、（呼応した遊び）、（意味づけての応答）、（質問）、（叙述）、（誘導）などの多様な行動もみられ、子どもの言語発達に貢献していると考えられる。

本研究では1歳8か月までのエピソードを検討したが、共同注意の発達モデル（大藪、2000、2004）では2歳半ごろまでのシンボルの発達においても形成的役割を持つといわれる。つまり共同注意状況での相互作用において、子どもは母親と不在対象（今ここにないものや過去の出来事など）を共有し、シンボル形成が導かれるとされる。今後はこうした、2歳以後の共同注意の発達に目を向け、共同注意の発達の全体像を明らかにする資料を得たい。

最後に方法論的な課題について述べる。メタ観察やその後の解釈が妥当なのかどうかはここでは検証されていない。エピソードのメタ観察には、複数の読み手による共通理解が前提であるが今回はその手続きを経ておらず、反省すべき点である。その意味で本稿は未完ではあるが、シングルケースによる上記の考察から、仮説生成的な研究としての意義はもつと思われる。

謝辞

Aさん母子には研究の主旨を理解していただき、

13カ月間にわたる自宅訪問とビデオ撮影に快くご協力いただきました。記して深く感謝いたします。

文献

- Butterworth, G. E. 1995 Origin of mind in perception and action. C. Moore & P. J. Dunham (Eds.) *Joint Attention: Its Origin and role in development*. (pp. 29-40) New Jersey; LEA.
- Hoffman, L. M. 1975 Developmental synthesis of affect and cognition and its implications for altruistic motivation. *Developmental Psychology*, 11, 607-622.
- 鯨岡峻 2005 エピソード記述入門 実践と質的研究のために 東京大学出版会
- Landry, S. H., & Chapieski, M. L. 1989 Joint attention and infant toy exploration: Effects of Down syndrome and prematurity. *Child Development*, 60, 103-118.
- 岡本夏木 1986 子どもとことば 岩波書店
- 大藪泰 2004a 共同注意の種類と発達 大藪泰ほか（編）共同注意の発達と臨床 川島書店 第1章 pp. 1-31
- 大藪泰 2004b 共同注意 新生児から2歳6か月までの発達過程 川島書店
- Tomasello, M. 1995 Joint Attention as Social Cognition. In C. Moore & P. J. Dunham (Eds.) *Joint Attention: Its Origin and role in development*. (pp. 103-130) New Jersey; LEA.
- Tomasello, M. 1999/2006 *The Cultural Origins of human cognition*. Cambridge: Harvard University Press. (大堀壽夫ほか訳 心とことばの起源を探る 勁草書房)
- Tomasello, M. 2003/2008 *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of language Acquisition*. Harvard University Press. (辻幸夫ほか訳 ことばをつくる 慶応義塾大学出版会)
- Willig, C. 2001/2003 *Introducing Qualitative Research in Psychology* (上淵寿ほか訳) 心理学のための質的研究法入門 培風館
- 吉田直子 2009 “共同注意”の発達的变化 その1 — 二項から三項への移行過程に関するエピソードに着目して — 中部大学現代教育学部紀要 1、pp. 91-103.
- 吉田直子 2010 “共同注意”の発達的变化 その2 — 「自他関係」の組織化に関する考察 — 中部大学現代教育学部紀要 2、pp. 67-76.

受付日 2010年9月30日

受理日 2010年11月24日

Abstract

Joint attention of children and mothers in the language acquisition period contributes to numerous facets, such as the child's symbolic function, language development, social cognition, and self-concept. This paper investigated mother and child interactions, which serve as a setting for both the development of linguistic communication and joint attention, through episodic description techniques with a focus on examples of observations of a single child. As a result, while acting in concert with the child's activities the mother demonstrated joint attention-like involvement such as exemplification behavior, reminding behavior, verbalization, and providing elaboration. It was implied that she supported and promoted qualitative changes to the child's understanding of people's intentions and their communication behavior. Moreover, when the child used vocabulary the mother was observed making utterances like descriptive responses, responses that impart meaning, facilitating questions, and descriptions. These are considered to be examples of "scaffolding" for the development of joint attention.

[Keywords] Joint attention, language acquisition period, linguistic communication, episodic description